

第3章 傀儡のための学校

大阪の文楽座は、この種の劇場は他にはなく、舞台を端から端まで闊歩し、ほとんど人間の様に振る舞う美しい着物を着た人形の演技には誰もが夢中になるに違いない。この人形は非常に大きく、少なくとも人間の三分の二の大きさで、プロの俳優のような動きを作り上げることが出来て、しばしば、その効果は俳優を超えている。これらの人形に命を吹き込む芸は並大抵のものではなく、人形が適切に操れるようになるまでには、大阪の学校で何年もの研究と練習が必要である。人形それぞれには一人の主な人形遣い（*主遣い）と二人か三人の人形遣い（*左使い、足遣い）が必要になる。彼らは人形とともに舞台に登場し、ほとんど背景に留まり、黒い頭巾と黒衣を着て観客から身を隠そうとしている。外国のほとんどの人形には紐が付いており、時には絡まり、さらには壊れてしまうことがあるが、日本では人形遣いが人形をしっかりと握っているため、そのような危険はない。主遣いは、人形の着物の下から手を入れて、背骨に沿って指が頭に届くまで滑り上げる。この操作は殆どあたかも人形の脳を動かしているかのようだ。

日本人は人形を人間の様に振る舞うようにするのが上手いだけではない。彼らは人間を人形の振る舞いの様に操作するのにも大成功している。そして、この芸においては、彼らは本物であると正当性を主張し、世界で他のいかなる国々よりも多くの国際的な人形（傀儡）を集めている。中国、モンゴル、ロシア、マレー島、ビルマ（**現ミャンマー）、タイ、インド、フィリピンと他の現在、日本が興味を持っている国々の人形を持っている。これらの人形の多くは文楽タイプで、頭が非常に強く握られていて、もし振る舞いに間違いがあったら、簡単に粉々にさせられるが、通常は間違えることはない。

人形は元々、中国から日本に入ってきた。日本はこれを戻すときに、芸を反転して、中国に導入した。ある程度の人間性と重要な東洋風の「顔」が、日本に征服された人々に自治と独立の空想を与えるために、価値があることを日本人は知った。征服された人々の中から募集することで、日本人が観衆の前には、あまり、現れることなく、彼らよりも優位な立場で扱うことのできる人形を作った。人間的人形を操る新たな芸の人形遣いは日本の軍国主義者であり、彼らはそれを独自に発展させ、自國に大成功を収めた。

恐らく、これが最初に使われたのはアジア大陸の朝鮮であろう。ここでは日本は朝鮮人ギャングを結成させ、彼らに1895年の朝鮮女王殺害に加担させることに成功した。テロと汚職を起こさせて国を完全に弱体化した後に、日本は朝鮮と併合したが、王家は残した。軍国主義者は、王家を朝鮮人の激怒したナショナリズムを鎮めるために利用した。朝鮮の王室が日

本帝国の皇室の初めての従属になった。朝鮮王家を日本に近づけるために、朝鮮の王室の李垠皇太子に、将来に日本朝鮮のハーフが生まれるように、日本皇室の女性を嫁がせた。もし、これが続けられれば、朝鮮家に残されるのは名前のみになるであろう。これが日本の計画であることに疑う余地がない。血統が殆ど日本のものになることは、軍国主義者が自分らの操り人形(傀儡)たちとして、あって欲しいことである。李に日本の家族だと思わせるために、彼に裕仁の皇居の近くに住まわせ、陸軍の権限を与え、現人神の天皇の特別な皇民と同じように、威厳と敬礼の方法を学ぶことが出来た。

日本によって、傀儡の作成は朝鮮から、中国へと疫病の様に広まった。満州ではあらゆる代理人が日本人に雇われ、これらのうち、清の最後の皇帝であるヘンリー溥儀を傀儡にして、康徳帝として即位させた。日本の軍国主義は溥儀に日本人と嫁がせたがったが、東京での一般的な噂では、彼は恋人の中国人で満州の実業者の娘の岳華への恋心から、これを強く拒否した。彼女は一般人だったが、二人は 1934 年に結婚した。(*記録なし)

しかし、それが満州の傀儡と軍国主義者の唯一の重大な不一致だったようだ。1940 年、神話上の皇紀 2600 年のお祝いに、上位の傀儡である裕仁に敬意を表するために東京を訪れるよう頼まれ、溥儀は同意した。彼の身長約 6 フィートの身長は、裕仁が彼に会いに連れて行かれた東京駅でかなり恥ずかしい光景を引き起こした。日本では現人神である天皇を見下すのは不敬に当たり、ほとんどの日本人は現人神である天皇が道を通り過ぎる時に見上げようとはしない。東京で八階建て以上の建物は許可されていないのは、皇居を見下ろすことができなくなるためだと知られており、皇居を見下ろすのは違反行為である。飛行機は皇居の周囲は通過するが、皇居の上を通ることはない。

しかし、溥儀が東京駅で裕仁と会った時には、上位の傀儡は身長が低かったため、彼を見下すか、或いは彼の上を見渡すしかなかった。溥儀が高い地位から裕仁を見下ろして微笑んだ時、その不敬は、その場にいた全員の緊張した笑えで隠されていた。これは溥儀が東京での一瞬の喜びの一コマかもしれない。上位と下位の神々が東京駅で出会った時の写真が夕刊に掲載されると、その身長差に気づかなかった日本人はほとんどいなかった。

それでも、溥儀は、裕仁が臣民から受けているのと同じように、神を愛する日本人から崇敬を受け、神聖な家族の一員として待遇された。天皇が道を通るときはいつでも、その経路に沿った集合住宅の住居者には天皇を見下さないように警察からブラインドを下げることが命じられている。同じ考慮が溥儀に対しても施行された。外国人が多く住んでいる文化アパートメントの住居者は、溥儀が東京に到着すると直後に、ドアの下に、以下の英語のタイプライターでの注意書きを見た。

NOTICE

His Majesty, the Emperor of Manchukuo, who is now visiting Japan, is expected to pass through the front of the Bunka on Sunday, the 30th. You are requested to pull down all blinds of your windows facing down, east, west and south during the following hours:

2:00 P.M.—2:50 P.M.

3:30 P.M.—4:10 P.M.

You are also required not to look down the party from your rooms.

The Management

通知

現在日本を御訪問中の満州国の皇帝陛下が 30 日（土曜日）に文化アパートメントの前を通過する予定である。以下の時間は東、西、南の窓にブラインドを下げるることを要請する。

午後 2：00—午後 2：50

午後 3：30—午後 4：10

また、部屋から一行を見下ろさないことも要請する。

管理人

最初の時間は溥儀が皇居から彼の行事のために出かける間、二回目は皇居に戻って来る間であった。彼の車がアパートメントを通過するよりも一時間前なのに、警察が私の部屋のドアをノックして中に入ることに同意を求めた。彼らは日本の文面統治者で天皇よりも直接支配を使っている。彼らが部屋に入って来るには令状は不要で、従って同意を求められれば拒否することはできない。彼らのうち二人が既に外国人が管理人の注意書きの指示に応じているかを見に来ていた。窓のブラインドは完全に下げられていた。しかし、警察は完全には納得していなかった。彼らはなぜ窓が閉まっていないのかと聞いてきた。明らかに、溥儀が下を通る極めて重要な時に、道路からの風でブラインドのスプリングが誘発されて、ブラインドが跳ね返って、開いてしまうかもしれないと思っていたのだ。窓を閉めて、再度ブラインドを下げた。警察は不満を漏らしながら認定し、他の部屋を調べに移動した。外国人居住者にとっては期待外れで、溥儀は通知されていたアパートメントの前は通らず、その隣を通りて行った。

溥儀が満州国に戻ってきたとき、陸軍は彼を驚かせるプレゼントを準備していた。それは、

裕仁の庭で見られるのとちょうど同じで、新しい壯麗の神聖な場所であった。その神聖な場所には日本の天照大神の精神が祭られていた。溥儀は恐らくこれまでと同じで、そのプレゼントに喜んでいないことは分かっていたが、すでに、神道の神社の前では、裕仁と同じように、頭を下げることを教えてもらっていたり、日本の女性への嫌悪感よりも、日本の神々への嫌悪感のほうが容易に克服してくれることが期待されていた。この神社と満州国との関係は伊勢神宮と日本との関係と同じで、溥儀は裕仁の役割と同じ現人神であり、死んだ神々を管理することになっていた。

日本のイメージを満州国に当てはめるために、軍国主義者は首都の新京の近くに軍国主義者の神社を建てた。ここには満州「事変」で殺された五千人の魂が祭られていた。これは東京の靖国神社の満州国版であり、日本の戦士の魂が保護されている。天照大神の神廟（建国神廟）と軍国主義者の魂の靈廟（建国忠靈廟）があることで、満州国の未来は保証されたとされた。官制の英語新聞の *ジャパンタイムズ・アドバタイザー* が、満州国での日本の軍国主義による 10 年の支配について論評し、「喜ばしい発展は天照大神の神聖なご加護による。」と書かれた。このご加護には五十の特別な（つまり日本の）企業も含まれており、この新聞によると、この企業は「門戸開放と機会均等」の原則に従って設立された。「全国民の意志による独立国として設立された」新国家のほとんどの富をこれらの企業が支配しており、全国民はこの恩人を滅ぼす機会だけを待っている。

アジアの舞台での、三番目の日本によって操られた主要な傀儡は汪兆銘である。利口で狡猾で、南京の牢獄で楽しむために蒋介石を見捨てた革命的な裏切り者である。ニューヨークのロチェスター出身の若い新聞記者のチェスター・ホルコムは東京で短期間働いた後、上海に飛び、日本陸軍をうまく説得して、南京に行って汪兆銘へのインタビューの許可を得た。彼は支配者によって厳しく監視されていた。インタビューで、汪がホルコムに自分の日本統治政府の「主席」としての職務にはあまり幸せではなく、実質的には囚人であると語ったといわれている。ホルコムはこのインタビューをアメリカ人が運営している、非常に勇敢な上海の週刊誌 *The China Weekly Review* に表題「南京の囚人」として書いた。このストーリーが上海の軍国主義者を激怒させ、ホルコムは、他のアメリカ人で日本の銃剣下で正々堂々と意見を述べたアメリカ人たちと共に彼らのブラックリストに直ちに載せられた。

汪が意図的にストーリーをホルコムに「植え付けて」、日本の軍国主義者のメンツを失わせ、そのことによって汪と彼の一派への掌握が緩められることを期待していたことに間違いない。彼らの一般的な不満と、日本が重慶と取引をして、彼らを裏切るのでないかという不安から、一年後の 1941 年夏に日本が彼らを鎮めることとなった。その時は南京の主要な傀儡が再教育のため、東京に呼ばれた。汪のために入念な晩餐会が行われ、皇居で裕仁自身か

ら個人的な接待を受けた。裕仁との訪問者は軍国主義者によって選ばれているが、汪が皇居の聖域に入ることが許された時の訪問数は過去最少だった。しかしこのことで、汪に神聖な紋章を与え、蒋介石と平和的関係になったとしても、すぐに彼を裏切ることはないことを保証した。

しかし汪と彼の一派は単なく歓待と保証では満足していなかった。彼らは中国の彼らの国民からの威信を失っており、彼らの威信を回復するためには、占領地域での支配権をより強く、彼らに与えなければならないことを東京の軍国主義者のトップに表明した。彼らは問題解決を力強く進展するために、自らの主張を直接日本国民に訴えた。周仏海は傀儡政権での行政院副院長・財務部長で東京朝日新聞に寄稿し、日本の占領地域での中国人の生活改善は成功しておらず、重慶市が管理している地域よりも優れてはいないと述べた。彼が述べたことは直前の本多熊太郎南京大使が述べたこととは完全に相反していた。本多熊太郎は不機嫌な傀儡たちと日本の軍閥を仲裁するために東京に来ていた。「新秩序」計画に、中国人は心から日本人と協調しており、全ては順調であると主張している軍部のプロパガンダで飽和状態になっている大衆について、周はいくつかの事実を單刀直入に明らかにした。周は占領地域での平和と秩序の確立を否定し、そこでは日本による完全な保護を期待していた中国人の生命が強盗とゲリラの部隊によって常に脅かされていると述べた。

周はそれだけでは終わらなかった。彼は、軍国主義者は占領地域の行政上の統制権を新たな政府に移譲すると約束しているながら、実際には、それは新たな地域に制限されていると指摘した。また、彼は、傀儡たちは中国北部を放棄し、黒幕にお任せしたいと思っていることを指摘したが、「少なくとも中国中央部と南部は完全に国民政府による支配下に置くべきである」と主張した。滿州国では、日本人が独占企業を使って国の経済的な富を奪ったが、この汪の腹心はその後、このような独占企業による使用を阻止し、国を保護した。南京体制は自己は「平等と相互扶助」に基づいて組織されていると説明したいようだが、中国の国民はこのような日本企業の「目的」を理解するのは困難だと、彼は皮肉に付け加えた。

役割に不満を抱いている傀儡は周だけではない。南京一派のもう一人の人物で、立法院長で上海占領地区の市長でもあった陳公博は、東京の雑誌『改造』に寄稿し、日本には言ったことを、更なる言葉ではなく、行動によって証明することを期待すると書いた。これは、野村吉三郎海軍大将がワシントンの新日本大使として出発する前に、ジョセフ・クラーク・グリーン駐米大使が送別昼食会で与えた警告に似ている。陳の発言から、日本が民主主義諸国との条約を破っただけではなく、自らの傀儡との条約も破っていることは明らかだった。陳は、戦争による混乱が中国産業に及ぼしていることを指摘し、中国は傀儡国のすべての富を日本に独占させようとする政策に基づく産業の復興に協力するつもりはないと明言した。中国

は国家であり、日本と同じように、国家の発展を切望しているのだ、と彼は叫んだ。

この南京傀儡への日本支配力の緩和を訴えた共同アピールにはほとんど効果がなかった。この時の総理大臣の近衛公爵は反抗的な傀儡をなだめるための何かを行う必要があることを知った。陸軍大臣で、その後大将になった東条もまた、日本は善意で行っていることを示す、偽物ではない何かが必要であることを知った。そして、出されたものは、これまでの、無意味な自信が満載され、過去に中国から強く抗議されたものと中身は同じで、これまで以上に分厚く、良くできた文書だった。傀儡への支援の新公約について、それが発表される数日前から報道機関は盛り上げようとしていたが、ドイツが突然、ソ連に侵攻したことで、全てのショーが台無しになった。ナチスが台無しにしたのはショーだけではなかった。新たな戦争の知らせが東京に伝えられた時、当時外務大臣の松岡洋右と政府職員が傀儡をパーティーでもてなしていた。松岡は傀儡には楽しんでもらうこととして、席を外し、彼の友人のヒトラーが引き起こした外交政策の新たな問題について調査するために外務省に直行した。

汪が東京を去る前に、外国特派員は彼の「インタビュー」のために招待された。しかし、情報委員会から、アンケートがあり、出席者は、そのインタビューの四日前までに氏名と質問内容を書面で提出するよう求められた。インタビューの日程は土曜日で、独ソ戦争勃発の一日前だった。自由な傀儡を見るには良い機会だったので、我々は皆出席することにした。ただし、アメリカ人として、提出された質問から構成される脚本には参加したくはなかったが。インタビューは中国大使館で行われた。中国大使館は蒋介石政権から中国の傀儡達に引き継がれていた。この大使館とは道通りのほぼ反対側にはいかめしい、冷たい感じのソビエト大使館がにらみ付けていた。ソビエト大使館は傀儡の隣人や黒幕が使用する事は殆どなく、従ってそれは、大きく、威嚇する、鉄の門の後ろにある、分別がある要塞だった。

私たちのグループが、炭を燃やすおんぼろのフォードのタクシーでちょうど丘の頂上にある中国大使館に到着すると、憲兵が出迎えてくれた。彼は私たちの情報委員会から配布された絹の身分証明書のリボンを見ようとした。それを提示して、その建物に入ることが許された。それは傀儡の黒幕である日本軍の本部よりもはるかに優れた構造物である。この建物は戦争の勃発前に中国政府によって建てられた。したがって、日本の軍国主義者が彼らの犠牲者の慰めのために何もかも剥奪したと結論付けるのは間違いである。記者会見が行われる部屋の入り口には、多くの警察官が、情報委員会の職員と並んで立っていて、入ってくる者全員を特定し、悪意のある訪問者は軍の保護区域に入らないようになっていた。

部屋は日本のニュース・カメラマンの大群でいっぱいだった。彼らは、直立で疲れることも退屈することもなく、何時間も続けてひとつの被写体を撮り続けたが、時には良い写真が撮れなかつたことわざがあった。私たちが部屋の端から端まで続く 2 つの平行した長いテーブル

に座り、在東京傀儡大使である褚民誼が部屋のすぐ外のベランダにあるロッキングチェアにゆっくりと座ると、部屋に汪の助手が登場した。彼は小柄で、みすぼらしい様子で、キラキラ輝く目を動かし、ちょこちょこした癖を持っていた。

彼は部屋の端に設定されていた小さな舞台に登り、我々と会えて非常に幸せであることを述べ、汪首席は彼（汪）の依頼に応じて情報委員会から出された特派員の質問票を受け取り、非常に喜んでいることを強調した。特派員は質問を会見の四日前に提出することが要請されており、それを日本の職員が調べて、適切な回答は「提案」されており、従って、彼が直接外国人特派員に直接会話することは不可能になっていると言う事実に非常に汪は神経質になっているように見えた。

この前触れが終わると、主役の汪がステージに現れた。後ろの更衣室から大股で入ってきたとき拍手はなかったが、近代の中国史のなかで最も奇妙な経歴をもつ一人である彼を見ようと、全員が立ち上がった。一時期は、熱心な革命家で漢口の左翼政府と関連していたが、最大の政敵である蒋介石から離れ、対日本共同戦線の総統と合流し、最終的には、共通の侵略者から中国を守るために結束することが必須という危機的状況の中、蒋を見捨て、秘密時に重慶から脱出し、日本と協力することになった中国人の顔に興味があった。国民を裏切ったことで彼が持っているに違いない屈辱を隠すのに、どのような顔をするのか、それはポーカーフェイスを含め、我々は見たくてたまらなかった。

彼はキビキビと壇上に登り、彼の助手の少し左の所定の位置に着いた。フォーマルな衣服を着て、黒髪は水かポマードでバックに整えてあった。主に、その少年のような表情から、実際の年齢よりも、はるかに若そうに見えた。非常に体つきがよく、良く知れた、かつて中国で尊敬を受けていた魅力的で力強い顔貌も失われていなかった。南京の傀儡は直立して聴衆に力強い顔を向けた。それはあたかも、たとえ、彼が敵側に脱出したことについて反対や、質問があったとしても、答える準備はあると言っているかのようだった。アメリカ人とイギリス人の特派員がここにいるのは彼の言葉を聞くよりも、むしろ彼を見たいからであることを彼は良く分かっていた。良く準備された前触れの後には、同じように良く準備された回答が書かれた書類の束を手に持ち、彼は完全に自分の役割を果たした。それはあたかも良く練習した役者のようだった。彼の神経質な助手が質問を英語で甲高く、よどみなく読み上げ、汪が回答を洗練した中国語で読み上げ、司会者が英語に翻訳されたものを朗読した。汪は彼の回答の翻訳が終わるまで真剣な表情を崩さず、次へと進み、この一連が最後まで繰り返された。

彼の回答は皆が予想していた通りだった。中国における外国に利益に関する質問については、汪は「友好国」に限って「合法的」権利に敬意を表したいと述べたが、明らかにその友

好国には大英帝国も合衆国も入ってはいなかった。しかし、枢軸国は友好国に含まれており、汪は南京と枢軸国が「協力して」「新世界秩序」実現のため進むだろうと述べた。蒋介石ではなく、汪が日本政府から重要視されているのは既に保証されており、汪は重慶が彼の南京政権に加わり、抗日を放棄することを願っていると述べた。何人かは彼のソ連への姿勢に関する質問に強い興味を持っていたが、これに対する回答は日本政府によって書かれた適切な回答を汪は持っていた。彼の政権と日本との共同による反共政策は一つのやり方であり、中露関係とは無関係であるとのことだった。漢口での共産主義の工作員として中国にやって来て、そこでの革命開始を援助したボルディンとの日々の革命的な思想は消え去っていた。彼は主体性と自由も消え去っており、壇上から降りて、彼が作品の朗読を終えるのを待っていた日本の軍国主義者の部屋へ戻って行った。

汪が日本人用にオウム返しで答え、これを日本政府報道官が我々に読んだのと同じように日本語に読み上げている間に、我々は汪の回答を数行の電報で送るために外に出ると、日本人と中国の傀儡の双方がすべきことはメンツを立てることではないことが分かった。我々が、再び憲兵に出会うと、彼は視線を建物の周囲に投げかけて傀儡を保護していた。門のすぐ外に無線装置を備えたアメリカ製のパトカーを見たが、これは東京の街中ではあまり見られず、特別な場合にのみ使用されるものだった。汪は第二国であっても安全ではなかったことは明らかだった。彼はどこへ行くにも厳重に保護され、道を車で移動するときは軍によって護衛され、道の周囲は通過予定時刻よりもかなり前から片付けられていた。

この不健康なドラマの中での彼の助手の一団も警察によって厳重に保護され、彼らが宿泊していた帝国ホテルで二十四時間の警備が続けられた。中国人がまだこのホテルに宿泊していた、ある夜遅くに私が入った時に、警察から厳しく監視されたことを覚えている。インタビュー後2、3日後に汪と彼の一団が去り、包囲が解かれ宿泊者は安堵した。汪らは日本人からはほとんど完全に無視された。日本人は独ソ戦争によって、新たな厳しい問題に陥り、傀儡と遊んでいる時間はなかった。

少数の特派員は汪兆銘に対して明確な意見を持っており、日中戦争における役割の解釈については二分されていた。何人かは、汪は実際には傀儡ではなく、蒋介石自身から了解を得て1938年末に重慶を去り、重慶と日本との交渉役になり、占領地域の中国人の生活を出来る限り楽にするために、支配地区の政権を引き継ぎ、可能な限りの譲歩を得ようとしていることを信じようとしていた。このような政策によってもたらされ得る結果は中国が日本からの最高な条件を確保し、最終的には南京傀儡と重慶政府の合併であろう。

確かに、この見方は東京、上海にいるアメリカ人の多くも共有しており、実際、日中戦争で二枚舌の前例がなかったわけではないが、他の多くの事柄を考慮すると、あまり受け入れに

くい。もし、汪が蒋介石の了解を得て去っているのなら、フランス領インドシナのハノイに潜伏中に、重慶の工作員に暗殺されそうになるはずがない。汪は潜伏場所では九死一生で脱走したが、彼の秘書は彼と間違われて殺されている。また、汪は野心家で、頂点に立つために一方と手を組んだ後、他方と手を組むことで知られていた。そうでなければ、これほど多くの理念を何度も裏切ることはなかっただろう。彼が信念の弱い人間であることは、既に明らかであり、このタイプの人間は傀儡作成にしばしば使われている。

重慶が汪に日本との交渉を行わせ、このことによって日中和解が起これば、それは米国にとっては不利であり、ワシントンは不安を感じてアメリカが中国からの援助要請を受け入れやすくなるので、重慶にとって、この交渉にはある程度の外交的価値はあったのかもしれないが、不利益な事の方が多い。政府の蒋介石に次ぐナンバー2で、重要な汪兆銘の離脱による挙国一致へのダメージで、行政的及び軍事的観点からの中国の利益を果たすことが困難になり、日本は重慶での分断で、抗日派の崩壊が加速されると信じ、日本による戦争遂行を促進することになるだろう。

汪は日本との平和綱領によって蔣の失脚と国民党の支持を望んでいたが、支持は得られず、最終的に米国の中国戦争への曖昧な政策が継続することになって、これが尾を引いてしばらくは重慶は着実に弱体化していくというのが、もっともらしい考えだろう。呉佩孚（ごはいふ）は高齢な軍事的指導者で、汪はその年齢から余り恐怖を感じていないが、彼と共に、中国の大衆を日本との和平の流れに乗せることができると考えていたようだ。汪は重慶の国内での政治闘争を過度に重要視し、第二次大戦勃発という革命的変化といった、国際情勢を軽視しているように見える。アメリカの外交政策がゆっくりと痛ましい形で具体化している。重慶の背後は固まり、日本は降伏するか運命の戦争を行うかの二者択一に直面し、その結果が大国としての日本の興亡と、この日本と直接的な傀儡の汪の運命を決定することになる。

しかし、汪の運命を推測するのは難しくはない。彼は同僚の溥儀よりも傀儡としては巨大で良好な傀儡になって、彼の民衆から完全に蔑視されるか（もし、既に軽蔑されているなら別として）、或いは、敗戦国の日本によって他の壊れた操り人形と共に、捨てられ、生産国では再び修理されないかのいずれかであろう。

汪兆銘が東京に来る前年に何人かの操り人形と人形遣いを中国の舞台で見る機会があった。ジム・チューは金髪で大柄でハーバードから来たばかりの若者で、私と一緒にアメリカが運営しているジャパン・アドバタイザーに勤務していた。彼は東洋を去る前、ロイヤル・エール・フランス航空に登録するために中国を見に行きたいと思っていた。私は彼と小旅行に行くことにした。しかし、神戸から天津に出港する前に、日本から「中国国民政府」からのビザを確保するようにと言われた。天津と北京は中国北部に位置し、名目上は南京の傀儡政権

の支配下にあり、ここへ行くためには東京ではなく、南京からの許可が必要になっていた。これは、新政府の独立性を創作するために設立されたものである。

我々はパスポートが我々の政府が認めていない傀儡政府のスタンプに汚されるという考えはあまり好きでなかったが、中国北部は見たかった。中国大使館など、東京にはビザを取得ところはなく、わけのわからない理由で、南京のビザが取得できるのは横浜のみだった。その事務所は小さな木造ビルに入っていて、以前は貿易会社が入っていたが、これは恐らく、戦時の経済制限により、貿易会社が廃業したためだと思われる。この経済制限は、軍が中国の傀儡政府の成立を決定したことで、必然的に引き起こされたものである。これは日本の軍国主義が行った中国侵攻が、自國に引き起こさせた悪循環を示す分かりやすい例であった。

若い中國人事務員がビザで中国の国民政府の領域へ訪れることが出来ると言ったが、それには六円もの費用がかかった。我々は驚いて口笛を吹いた。以前はビザも費用も不要だった。事務員の説明では、費用は事務所の運営のためだそうだ。貿易ビジネスで成功するよりも、ビザのビジネスの方がずっと楽なのはすぐに分かった。ビザを取得したい外国人のために、必要な投資は沢山の漢字のゴムのハンコ、朱肉と英語のタイプライターだけだ。南京政府と米国間にはこれまで商取引などの協定がなかったという事実、日本人が米国に訪れる時の双方の合意から、アメリカ人が日本の領域に入るためのビザ取得は無料であるという事実があるが、我々にはこれらの専門的な知識で議論する時間はなかった。我々はカウンターにお金を置いて、ビザを買うと事務員に言った。私たちに渡された書類は、我々が日本に到着したときに記入したものと非常によく似ていて、新しい書類が誰によって作られているのかを推測するのは難しくなかった。ようやくビザを受け取った。このビザには、2年間、中国に何度も訪問できると書かれていた。外に出るときに、私はチューに、私たちのビザの有効期間は、それを発行した政府の存続よりも長くなることがあるかと思うかと聞いてみた。

天津近くの港に到着すると、新たな奇妙な商売に遭遇した。桟橋で我々の日本のお金を渡し、新たな中国政府の紙幣と交換しなければならなかった。通貨は中国の一元と日本の一円の額面交換だった。東京では1円がアメリカの約25セント硬貨に相当するが、軍が印刷機で作った新たな中国のお金では、それは5セントの価値しかなかった。しかし我々は、算数も論理も通らないのが当たり前の統治下にある、「新秩序」中国での「お客様」だった。25セント相当のぼろぼろの円札を5セント相当の新札の元札と交換したが、日本のお金をあまり持てこなかつたことに喜んだ。後で知ったことだが、日本軍は我々から円を取り上げたのは、日本から大陸への通貨流出による円安を防ぐためだった。

翌日到着した北京は、日本に占拠されていたにもかかわらず、変わることなく美しかった。壮麗な寺院に唯一被害があったのは、美を愛する日本国民が、ちょっとした記念品を故郷に

持ち帰ろうとしたために破壊行為を行ったことだった。これは、ある反日ガイドからの話だ。そして、彼自身も同じような破壊行為を申し出て、天壇近くの建物からエナメルタイルを私のために1枚取ってきてくれた。奇妙なことに、日本軍に占拠された北京で、私は3年ぶりに東京で常に感じていた抑圧感を振り払うことができた。東京では、北京よりも軍国主義者による抑圧感が広く占拠していた。北京には、私たちと同じ志を持ち、自由と抑圧の意味を理解し、神や幽霊についての愚かで野蛮な神話に魂を明け渡すことを拒み、都市郊外の駐屯地から自分たちを支配している傲慢な集団から自由になるという確信からあらゆる考え方や感情が湧き出る東洋の人々がいた。東京が一見したところでは、占領地ではないにもかかわらず、魂を無くした街であるのに対して、北京は、たとえ、外国軍に占拠されていても、自由な人々の街であると結論せざるを得なかった。

チューと私にとって、北京は深呼吸で東京に長期間滞在して頭の中に蓄積されたモヤモヤを振り払うようなものだった。そして、世界の誰もが死にかかっている状態になっているわけだはないという事実に気付かせられた。また、日本軍の存在を忘れることさえも出来た。親切なアメリカ人で、重慶政府に勤務している中国人と結婚しているチェン夫人が我々を様々な寺院にドライブで連れて行ってくれた。寺院は壮大なスケールで配置されており、人間がガリバー旅行記の小人に縮小されているようだった。たとえ、威張って歩いている日本兵でさえも、北京の寺院の大きさには吸い込まれていた。寺院の敷地内をさまよっていると、街を支配している軍国主義者を含め、他の全ての人々のことを忘れることがあった。我々は、北京がくれた東の間の文明との別れを惜しんだ。

我々と同じように、日本軍も北京と別れたなく、北京に住んで楽しんでいることを知った。北京を去る前に、チューと私は陸軍報道官の高田大尉に会いに、日本軍駐屯地の本部に訪れた。そこでは、例の銃剣を逆立ちにして、傲慢そうな守衛と遭遇した。彼らは日本語で話しかけられると少し態度を和らげ、高田大尉の事務所がある建物に通してくれた。

私たちが最初に気づいたのは、彼が日本製のタバコとマッチをたっぷり持っていたことだった。私たちが東京を発った時、どちらも容易には入手できなかいものだった。高田少尉は中国にはタバコ、マッチなどの日本の品物がたくさんあると言った。東京に居る時間が短い理由もここに来て容易に分かった。また、中国北部に創り上げた新帝国で日本軍が完全に満足しているのも容易に分かった。高田少尉はここではすべてが平和で、誰もが完全に幸せであると言った。彼は、多くの外交官が中国の他の地域から北京に事務所を移しているという事実を自慢していた。北京はより安全で快適だからだ、と彼は言った。高田は、それは日本軍に対する素晴らしい賛辞だと考えた。実際には、それは日本軍が居ようが他の軍隊が居ようが、彼らによって、損なわれることがない中国の都市に対する賛辞だった。

中国北部の日本軍は良いものを物を手に入れていることを承知していたが、それを中国人に返還するつもりはなかった。我々は、高田少尉に汪兆銘政権が中国北部の陣営を引き継ぐことになるかを聞いてみた。彼は、はぐらかすことなく、中国北部の陸軍は汪と彼の新政権に共感していないと完全に明言した。全ては陸軍の支配下で順調に運営しており、同じことが汪らにもできるとする根拠がないと高田が言った。

明らかに、中国北部の陸軍は自らのための傀儡を自ら選びたかったが、決められて欲しくはなかった。中国北部陸軍のために傀儡を選ぶことは、たとえ推薦だとしても、それは陸軍の統治権への侵害に値した。満州国の陸軍と同様、東京、中国中部、中国南部の軍はそれぞれ独自の帝国を持っており、互いからの干渉を受けたくはなかった。中国北部の陸軍は中国を少なくとも三つの帝国に分割し、それぞれを三つに分割した日本軍が支配し、このことによって互いに共通の利益を持って「協力」するという政策を好んでいた。

中国北部陸軍の帝国は南部は黄河まで広がっており、ここからは中国中部陸軍の帝国になっていた。一つの帝国から他の帝国への移動は、国が変わると同じであった。中国北部から中部への「国境」で私とチューは朝5時に起こされ、我々は北京から南京へ旅行中で中国北部のお金を中国中部のお金に換えるために、列車から降りるようにと言われた。お金は軍の通貨だった。この二つの日本の帝国は通貨も違っていた。中国中部は汪兆銘の国で、彼が北京訪れようとしても、中国北部の新たな権力者による特別な許可がなければ、行けなかつたであろう。高田少尉が言ったとおり、汪兆銘は中国中部の軍の傀儡に過ぎず、中国北部の陸軍と混同してはならないことは明らかだった。

チューと私は前日の朝早く北京を出発していた。列車には中国北部と中国中部の帝国の傀儡らが乗っていることを知った。これらの傀儡のうち二人が南京までずっと我々をもてなしてくれた。一人は我々が乗っている列車の傀儡中国鉄道会社の副社長で、もう一人は彼の友人で、濃い黒い口ひげをはやし、お腹が出ているのであくまで大笑いをする大柄な中国人医師だった。彼を笑わせたのは線路の「視察」で旅行中の鉄道副社長だった。全ての駅で陸軍の衛兵が客室のドアを開け、副社長は急いでホームに出て行った。ホームでは各駅で雇用されている若い日本人の代表団が実演用のカーキ色の制服を着て、集められていた。彼らが一斉に深く頭を下げるとき、背が低くて丸々と太った中国人の副社長は彼に演じられる最良の日本式の会釈で返すのだった。三回か四回の互いのお辞儀の後、車掌が機関士に出発する合図を発すると、副社長は列車に飛び乗った。日本人の鉄道部隊が「万歳」の連呼で彼を熱烈に送り、役人はこれに応じてさらに頭を下げ、列車は駅から離れて行くのであった。

彼が客室に戻り、衛兵がドアを閉めると、医師が急に大笑いをして、それを見るチューと私も釣られて笑ってしまうのであった。彼はホームでの仕事ぶりが行われている間は自分を抑

えているが、列車が再び動き出し、衛兵が去ると、これ以上、我慢することが出来なかった。彼は笑いを、一拳に何分間もあふれ出し、残りを解放するために、はけ口として杖で車両の床を叩くのであった。ようやく少し冷静になると、我々が目撃した場面を彼の奥深いユーモアのセンスに接しながら再演した。医師は東京の慶應大学を卒業しており、日本語会話は完璧だった。最初に鉄道部隊を監督した日本人の駅長の役を演じ、日本語で副社長へのあいさつの言葉を真似した。それから立ち上がって、少しぎこちなく恥ずかしそうに腰を曲げることで、傀儡の役人を演じると、副社長はそれが誰のことを演じているのかが分かった。最後に日本人が行うように、両手を上に挙げて「万歳」と叫んだ。その頃には、医師は再び爆発的な笑い声をあげ、笑い声が絶えまなく湧きあがるのであった。

この小さい丸い副社長はホームでの彼自身の現物の傀儡の演技のために傀儡として出て行くときは恥ずかしそうに赤面していたが、我々三人の笑い声に加わる時はそれを消そうとしていた。冗談を言い、楽しんでいる間に、この副社長について少しだけ知ることが出来た。一つは、彼は今の仕事がこの仕事で冷笑される以上に好きではなかった。医師が我々に、彼は、日中戦争勃発後に日本に占拠される前から鉄道線路の副社長の中国の役人だったと教えてくれた。日本は彼に今の立場を続けるように頼んだ。これに拒否することは、彼の北京の全財産の没収と彼の家族への危険を及ぼすことを意味していた。さらに、彼には日本人の支配外での働き場所はなかった。彼は申し出を受け入れた。しかし、彼の支配者に対する憎みと嫌悪を我々に隠そうとはしなかった。そして、我々はその理由を知ることになった。

別の駅に近づくと、憲兵が私たちの車両に入り、身分証明書と旅行許可証の提示を求めた。副社長は北京の日本当局者から与えられた特別なカードを提示した。すると、日本兵の一人が、私にもわかるほどの非常に粗野な言葉で、予防接種証明書を持っているかどうかを尋ねた。残念ながら副社長は持っていないかった。兵士は彼の腕をつかみ、座席から私たちの車両の出入り口まで引っ張り、処置を行うためにメスとワクチンを用意して近くに立っていた別の兵士を呼んだ。役人が、彼は副社長であり、すでに予防接種を受けていると主張した。列車に乗っていた日本の文官も、問題を起こした副社長のために仲裁したが、日本兵は私には理解できない何かを叫んで両者を黙らせた。不運な副社長の袖が上げられ、担当の兵士による処置がなされた。彼に医療経験があったかどうかは私たちにはわからなかった。彼は日本軍の正規兵の普通の軍服を着ていただけだった。彼らが彼の仕事を終えると、彼は車両に押し戻され、ドアが閉められた。どういうわけか、残りの私たちは証明書の提示さえ求められなかった。

鉄道会社のナンバー2は席に戻ると怒りと恥ずかしさで燃え上がっていた。しかし、友人の医師が、今起こった出来事の場面と真似をして、警察が毒殺されたと仄めかして場を和らげ

ると、私たちはすぐにまた笑い始めた。副社長は殆ど自分自身を落ち着かせていないまま、列車が止まった。衛兵がドアを開け、役人はホームでの新たな演技をするよう合図を出した。この頃になると、我々はやりたくもない仕事をする彼に同情し始めていた。そして、医師はどうやら、彼のホームでの場面を茶化すのを繰り返すことに飽きているようだった。

役人が出て行く前の少しの間に、役人にゲリラの活動によって、脱線事故は多いのか尋ねてみた。彼はそれほど多くはないと言った。週に一回か二回くらいしかないと誇らしげに言った。彼は我々が考えていたゲリラの件数がかなり良い記録であることを誇っているのか、それとも、事故の頻度がすごく多いわけではないことで喜んでいるのか、我々にはよく分からなかった。役人が列車を降りた後に、医師は我々の客室から他の客室へ行った。その客室には彼が若い日本人女性を残していて、彼女は明らかに彼の愛人だった。彼が我々といた時に、北京に妻と子供がいて、「仕事」で上海に行く予定だと言っていた。彼とこの日本人との関係については詳しく聞いていなかった。彼は南京の日本人ホテルではよく知られている様子だった。南京では一泊して、上海行きの列車を待たなければならなかった。列車は、夜間はゲリラに襲われる危険があるため、昼間しか走っていなかったからだ。我々が上海に到着すると、彼は、駅で軍の検査を通過する際に彼が冷笑した鉄道職員よりも上手に挨拶をして、傀儡の役を演じているようだった。南京のホテルでは、外国人と話しているのを見られると日本人から疑われると感じたのか、我々のことを知らないふりをした。

さらに露骨なケースがあった。北京を去る列車の中で、名前が同じで役人であるチューと出会った。この中国人は技師で南京の「復興」大臣 (**minister of reconstruction) と一緒にいた。彼はこれまで見た中で最も独り善がりで、貪欲で、腐敗したような表情をした官僚だった。彼には兄弟がいて、同じ技師で重慶に勤務していて、彼も重慶へ行きたいのだと教えてくれた。しかし、彼の家族と財産のことを見守るために、占領地に留まるように頼まれたという。彼は日本人に対する自分の態度を言葉で表現し、日本人の優れた功績のいくつかを語った。チューと私は彼と南京で食事をする約束をした。我々は汪兆銘の幽閉を見てから、この中国人の友人と食事のためにホテルに戻った。彼は彼の上司の大尉から別の用事を与えられたと謝り、我々は理解した。

内モンゴルの現地傀儡や満州の白系ロシア人犠牲者に対する日本人の活動について触れずに、中国における日本人について終わりにすべきではない。李垠皇太子、溥儀、汪兆銘などの傀儡は主に国内目的で使用されているが、将来の対ソ作戦の拠点となる内蒙疆（内モンゴル）と北満州では、日本軍国主義者が海外での使用目的とした傀儡を開発していた。日中戦争勃発後もなく、侵略者はいわゆる内モンゴル連邦自治政府の長として徳王を据えた。彼の立場は汪兆銘と多少似ており、彼は時折、モンゴルの彼の一派とともに東京に連れてこら

れ、「新体制」との適切な協力について指導を受けた。しかし、おそらく徳王より重要なのは、内蒙疆の首都帳家口にある蒙疆学院の校長である常岡寛治中将が輩出している第五列の兵士と工作員の軍隊だ。彼らはこの軍事学校を卒業後、日本軍将校から訓練を受け、日本の発表によると「内モンゴルのさまざまな地域に指導者として配属される。」彼らが率いるのは、もちろん、ソ連と外モンゴルの拠点に対抗する将来の妨害工作員とエージェントの集団だ。ジャパンタイムズ・アンド・アドバタイザによれば「内モンゴルは反共産主義回廊地帯を形成しており、政治的、軍事的、人種的に非常に重要である。」

(**第五列：本来味方であるはずの集団の中で敵方に味方する人々、つまり「スパイ」などの存在を指す。 Wikipedia)

さらに印象的で意思を明確に宣言しているのは満州での日本によって組織された白ロシア・ファシストである。ロシア・ファシスト党の党首として知られているのがコンスタンチン・ロジャエフスキイで、年齢は35歳、空想的な冒険家で顎と口に鬚を生やしてロシアの最後の皇帝に似るように強調し、日本に頼んで、その最後の皇帝を引継ぎ、モスクワで新たな王座に就くことを願っていた。党の本部はハルビンにあり、以前は「東洋のモスクワ」と呼ばれ、ボリシェヴィキ(**)から三万人が飛び出して日本の砲火の土地に落下した。ロシア人の政治的グループとして、ファシストと君主制主義者（モナーキスト）の二つのグループに分けられ、後者のリーダーはキスリーツィン指揮官で、第一大戦で兵役を経験している。どちらも日本による犠牲者であり、互いに日本が味方になってくれるように競い合っている。キスリーツィンは支持者が一万八千人、ロジャエフスキイは支持者が一万二千人だと主張している。

(**ボリシェヴィキ：ロシア社会民主労働党が分裂して形成された、ウラジーミル・レーニンが率いた左派の一派。 Wikipedia)

しかし、党首はその突進的なやり方と空想的な考え方で、日本の軍国主義者の目に留まった。党首は彼の「精銳部隊」を本部の周囲に擁しており、本部には等身大の最後のロシア皇帝とロシア皇后の油絵が最適な背景として掲げられてある。イタリアのファシストと同様、彼のギヤングのメンバーは日本から黒シャツとクロスベルトが提供されている。枢軸同盟の三番目の国を差別化しないよう、ナチスのかぎ十字を組織のシンボルとして使っている。ロジャエフスキイは彼の事務所は白ロシア・ファシストの世界組織の本部で、党員は25ヶ国から3万2千人いると主張した。また、ファシストの第二の事務所はニューヨークにあり、ここでは党員が独自の新聞を発行し、ハルビンから指示を受けているという。

党員にはタタール人、コサック人、ジョージア人、アメリカ人も含まれているという。ソ連

には 115 人種の党員がいると党首が主張した。ロシア人であれば、ユダヤ人以外で、年齢は保守的、反動的なファシストの教義を十分に理解できる 5 歳以上であれば男女とも入会可能である。日本の紀元二千六百年記念行事には、ロシアのファシストは日本人の行進に加わることによって、彼らの天照大神への忠誠を誇示した。

しかし、日本でファシストの傀儡から最大の喜びを受けているのは満洲里支所にある。満洲里支所は国境までは 2 マイル以内にあり、高いビルの屋根に巨大なかぎ十字のネオンが立て、毎夜イルミネーションが施され、炎でソビエトを威嚇している。ロジャエフスキイ党首はいつの日か、彼のかぎ十字を、国境を越えて持って行けることを待っている。同じように、待っているのが、キスリーツィン指揮官である。彼は満州で訓練している白ロシア兵士の軍隊のリーダーとして、日本軍とともに、ソ連と交戦することを期待している。何れも日本用の売国奴としての大きな希望を抱いている。

私が中国から日本に戻ってからすぐに、軍国主義者の「大東亜」建設の計画の具体化が開始された。建設には何年もかかり、計画には、その過程における新たな一連の傀儡が含まれている。これらはインドシナ、タイ、フィリピン、ビルマ、マラヤとインドで行われた。

傀儡の多くは自国での運動に積極的に参加している。日本の工作員がインドシナとビルマ、マラヤの自国民に外国支配に対する反乱を惹起させようとしていたことが広く知られているが、タイでは陰謀と収賄によって、日本に友好的で、民主主義諸国には敵意を持った政府を樹立させた。太平洋戦争勃発の直後に英国は英國領ビルマのウー・ソウ首相を、日本との取引の疑いで逮捕したことを発表したが、これは、日本が戦争開始前の長い間、深く浸透していたことの表れだ。もう一つの日本が早くから準備していたと考えられるのが、フィリピンの反乱軍の将軍だった、エミリオ・アギナルドの政権である。これは日本が樹立していた傀儡政権である。

戦争勃発の 4 か月も前の、1941 年 8 月マレー半島の最南端でシンガポールに対峙し、戦略的に要所であるジョホール王国が、君主によって日本に売られたという報道が東京で広まった。当時の、官制のジャパンタイム・アンド・アドバタイザーが「ジョホール王国の君主は英國の束縛を憎む」の見出しの記事を掲載した。そこでは、君主は英國が嫌いで、これを忘れるために虎狩りに行くような、「勇敢で正義感がある性格がある」と言及している。君主は日本とは非常に友好的で、1934 年に日本を訪問し、天皇から彼に旭日大綬章が授与され、日本に対する愛着を抱くことになっていたことについても書かれてあった。

日本がタイに侵攻直後にタイ軍が民主主義諸国に対する戦争に参加したことは、既に何年にもわたって訓練してきた傀儡が、日本の指示に迅速に反応できるようになっていたことを

示している。バンコクを支配してしまえば、いわゆる親英派と親米派を撲滅し、親日派に置き換えるのは難しくはなかった。1941年年初頭、タイの当局者がインドシナとタイ間の国境紛争の解決の交渉を求めて東京を訪問中、日本は彼らに「大東亜」の教義を受け入れさせよう精力的に尽力した。日本は当局者が「新秩序」を受け入れやすくなるように、毎晩の宴会を催した。日本はタイ現地にいるナショナリストや陸海軍の過激主義者から多くの傀儡を採用していたが、日本にやって来た当局者から傀儡を採用することはなく、隠そうとせず、賄賂で買収することを試みた。タイでは、日本は有効な第五列を陸軍と海軍だけではなく、政府内にもインドシナとの国境紛争が起こる前から確立していたという噂があった。日本の計画と対インドシナ戦用の軍事物資を送ることによってバンコクで日本とタイの当局者の絆を強めることになった。

日本の野心はタイよりも先を向いており、それを実行するための準備も行われている。インドから、東京で恐らく最大なグループが第五列と傀儡の訓練のために集まっている。このグループは印度独立連盟という名で活動している。この議長がラース・ビハーリー・ボースで、日本は彼をインドでの傀儡政府の主導者になるよう教育している。彼らはボースを将来のインドでの汪兆銘とみなしている。ボースが重要視されていることは、彼が犯罪組織で、中国以外にも日本のための有能な傀儡を複数作りだしている黒龍会のトップである頭山満から庇護を受けている事実からも分かる。私が東京を去る少し前に、頭山は準備して、東京増上寺で、ボースに中国と満州で亡くなった日本兵を称賛し、「日本人が行なってきた偉大な役割への感謝」を表すための「忠実な」インド人のデモを行わせた。日本の二番目のインドの傀儡はA.M.サハイで、「新秩序」を支持し、英國領インドに反対するためのインド人の組織を神戸と大阪で立ち上げている。

征服と占拠領土の支配の手段として、日本は間違いなく、世界で最も有能な傀儡を作り出した。「八紘一宇」の教義の例からも分かるように、傀儡を作り上げ、操作する能力は日本の軍国主義の才能によって発展されており、これはヒトラーやムッソリーニが世界に現れるかなり前から熟達していた。傀儡で成功しても失敗しても、日本の軍国主義者は頭を下げなければならないだろう。